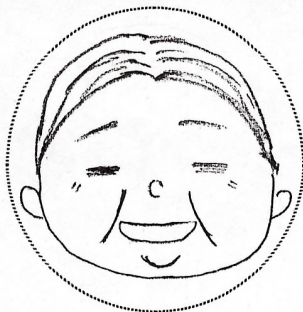


学校だより 希望の鐘

ひとつの鐘はいつしかひびかない



八戸市立 小中野中学校

平成28年11月14日(月)

No.64

文責：校長
工藤聡

私の友達シリーズ② 「M先生」

M先生。昭和34年3月6日生まれの57歳。現在市内のある中学校の校長先生です。私とM先生とは同学年で、住んでいるところも河原木というところで同じ、そして八戸市立白銀南中学校が開校した時に一緒に勤務したということで、今でもいろいろな話をします。友達という以前に、私がM先生を尊敬しているといった方がいいかもしれません。「尊敬している」というと大げさですが、何よりもM先生の「ぶれない(ブレナイ：あるべき位置からはずれたり、かたよらない)生き方」がスゴイと思うからです。きょうは、「友達シリーズ」の2回目として、M先生の人生の一端(イッタン：一部分)を紹介しながら、その「ぶれない生き方」を学んでみたいと思います。

M先生は、小学校の4年生からサッカーを始めました。ちょうど4年生の頃に、サッカーのスポーツ少年大会があり、その小学校からも出場することになり練習することになったのです。最初は運動することに魅力を感じていただけですから、中学校に入学した時も、最初はバスケットボール部に入学したのです。サッカーが好きになったのは、中学校1年生の時の担任の先生が保健体育専門で、国体にも出場したことがあるサッカーの選手でした。そのため体育の時間はいつもサッカーで、しだいに好きになったのです。サッカーはみなさんも知っている通り、ゴールキーパー以外は手を使うことができません。不自由でもどかしい(モドカシイ：思うようにならないでじれったいこと)からこそ、自由自在にボールを扱えた時の喜びは、何物にも変えがたいのだそうです。すんなり成功するよりも、失敗を何回か重ねた後の成功が何倍もうれしいのと似ています。当時のM先生が在籍していた中学校のサッカー部は強豪(キョウゴウ：勢いがさかんで強いこと)で、M先生も3年生の時に市中体で優勝し、県大会では決勝で敗れたものの準優勝でした。

さて、高校進学を控えたM先生は、入学する高校については全く迷いませんでした。サッカーを続けてきた仲間8人とともに、その頃は県内でもかなり強かった工業高校へ入学したのです。

高校では猛練習に明け暮れました。つらかったこともありましたが、サッカーが好きだからこそ耐えられたのではないのでしょうか。高校3年生の時は、県大会の決勝まで進みました。決勝では敗れましたが、それでも満足で、工業高校に進学して良かったと思ったそうです。

高校卒業後の進路は、将来サッカーに携われる職業ということで先生を選び、そのため弘前大学教育学部に進学することにしました。勉強は楽しいものではありませんでしたが、サッカーを続けられるということを目指して合格することができました。大学2年生の時、総理大臣杯という大会があり、その東北大会では破竹の勢い(ハチクノイキオイ：勢いが激しいこと)で勝ち進みました。弘前大学サッカー部始まって以来の快挙(カイキョ：胸のすくような立派な行動)でした。そして、決勝は仙台大学との対戦になりました。0対1で負けていた後半に、M先生がペナルティエリアで頭を蹴られ、PKを得ました。その時のキャプテンは、キッカーにM先生を指名し、M先生も自信はあったそうですが、ゴールポストに当ててはずしてしまっただけです。試合も0対1のスコアのまま終了し負けてしまいました。その時に生まれて初めて人前で泣いたのです。一生懸命やってきたからこそ、失敗したことがぐちゃぐちゃで、人前でも泣くことができるのです。

大学卒業後は、先生として生徒にサッカーを教えながら、自らも教員チームに所属しながらサッカーに関わってきました。校長になった今でも、サッカー部で指導しているそうです。

M先生の生き方の根底(コンテイ：根本。基礎)にあるのは、サッカーをやりたいという強い気持ちです。その希望がほぼかなえられてきた人生だと思います。本当に幸せだと思います。しかし、それは偶然そうなったわけではなく、サッカーをやりたい気持ちに正直に、そしてそのために努力してきたからです。「サッカーをやりたい」ということから『ぶれることがなかった』からこそ、かなえられた人生なのだと思います。M先生がサッカーを始めたのは、中学1年生の時です。そのことがM先生の人生をほぼ決定づけたのです。みなさんもひょっとすると、自分の一生を決定してしまうかもしれない何かを、今やっているのかもしれませんが。今週末の4次テストも、もしかすると、自分の一生を決定する何かにつながっているのかもしれませんが。